働く人を支えられるような服を作りたい。

8

2024

松浦菜奈
縫製

「幼い頃はずっと兄や姉のおさがりでした」と話す松浦さん。物心がついてくると、「やっぱり自分の好きな服が着たい！」と色々なお店で服を見て回るうちに、ファッションが好きになったそう。そして、服を作る仕事に就きたいと服飾系の専門学校へ進みます。在学中に縫製などを学びましたが、一度は別の業界に就職したそうです。「縫製を仕事にするのは難しいかなと思った」と、当時を振り返る松浦さん。しかし地元へUターンする転機を迎えたとき、「やっぱり服に関わる仕事がしたい！」と服づくりへの思いが再燃し、縫製の仕事への転職を決めます。

専門学校を出て10年以上経ってからの入社で不安でしたが、学校では見たことがないミシンを見て「かっこいい！」と感じた、と笑顔で話す。右も左も分からない中でのスタートでしたが、先輩が優しく教えてくれ、1年間で一通りのミシンは使えるようになったそうです。入社2年目の現在は、スラックスやカーゴパンツの縫製を担当しています。生地の特性に合わせて縫い方を変えてみるなど、試行錯誤の日々を積み重ねています。「少しの工夫で出来栄えが目に見えて変化し、作業効率も上がります。成長を実感できることが楽しいです」。

縫製の仕事は、デザイナー、パタンナー、営業など多くの人の思いを形にすることだと話す松浦さん。炎天下の中でも長袖を着ないといけないこともあるのがユニフォーム。「好きな服を選べない分、良い服を作る責任をより強く感じています」。そう話す松浦さんは、「快適な服を作ることで、働く人の支えになりたい」と力強く語ってくれました。

もっと生の声 Q&A

思い出に残っているエピソードはありますか？

縫製の仕事は、普段お客様と接する機会がなかなかありません。地元の一大イベントである「児島フェス＃せんいさい」に参加したとき、初めてダイレクトな声を聴く機会があり、多くのお客様が「値段が安いのに品質がすごく良い」と喜んで買ってくださいました。その時に、この仕事に携わることができて良かったと実感しました。

今後実現してみたいことはありますか？

パンツ以外の製品や別注アイテムの縫製にも挑戦したいです。トップスは少し難易度が上がりますが、どんどんチャレンジしていきたいです。日本製の質の良さがしっかり伝わる製品を、いずれは“フルコーデ”縫えるようになりたいです。

将来繊維業界に従事する人へのメッセージをください。

私がそうだったように、繊維業界に一歩踏み出す自信のない人もいると思います。でも、この仕事はやりがいが多くてやっぱり楽しいです。常に新しい技術や素材が登場し、時代によって求められることも変化していきます。繊維産業の未来を担っている喜びを感じながら自分も一緒に成長できます。勇気を出して一歩を踏み出してほしいです。